

れき じん
となん歴民だより vol.1

Morioka tonan folklore museum

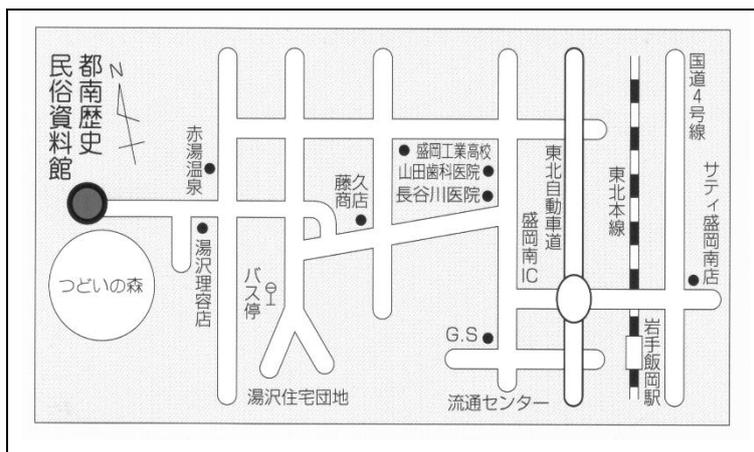
平成16年6月25日発行

発行 盛岡市都南歴史民俗資料館 盛岡市湯沢 1-1-38 TEL019-638-7228



当館所蔵写真パネル <農作業の様子>より 「馬鋤」

MAP ☆ACCESS



— もくじ —

- ・資料館展示室の紹介
- ・特別展予告
- ・今年度自主事業の募集
- ・盛岡市所在
指定文化財紹介①
- ・農具・民具貸出のお知らせ
- ・資料は語る①
- ・となんの昔ばなし①

○利用案内

開館時間 午前9時から
午後4時まで
入館料 無料
休館日 月曜日
(休日に当たるときは
直近の平日)
年末年始

森の中のミュージアム 都南歴史民俗資料館

旧都南村地域の歴史は、古くは縄文時代にさかのぼり、先人が今日にのこしたさまざまな資料から、そのあゆみと文化の移り変わりを知ることができます。当資料館では、都南地区の民具・信仰資料・歴史資料を中心に、貴重な文化財を収蔵し展示公開しています。

展示室の御案内

【本館展示室】

- 歴史資料 古文書・書籍・寺子屋教科書など
- 信仰資料 社寺参詣資料（道中記・地図・御守など）
民間信仰資料（十月仏掛図・オシラ神など）
- 寄贈コレクション 刀剣・甲冑・浮世絵など
- 考古資料 都南地区の遺跡出土品・遮光器土偶（複製品）
・蕨手刀



【新館(収蔵庫)展示室】 1F・2F

- 民具資料 農耕具・生産用具（製糸・山樵など）
生活用具・はきもの類・衣類
パネル展示「農作業の様子」

研修会 史跡・文化財めぐり『歴史の街道散歩』—秋田・沢内街道周辺の史跡文化財を訪ねて—

資料館では、6月と9月に『歴史の街道散歩』と題した史跡・文化財めぐりを実施します。今年も当資料館運営委員の吉田義昭氏を講師に迎え、「秋田街道・沢内街道周辺の史跡文化財」をテーマとしたバスツアーを実施します。

- 第1回は6月25日(金)に行われ、沢内街道沿いを中心に見学しました。次号にて当日の様子をお知らせします。
- 第2回 9月17日(金) 《9月1日受付開始》 ・見学先 秋田街道沿いを中心に見学 ・参加費 3,800円

◎申込方法などの詳細は、広報もりおか9月1日号でお知らせします。

平成16年度特別展『学びのあゆみ』 ～予告編～

今年も9月1日から10月31日まで『学びのあゆみ』と題した特別展を開催します。全国に小学校が設置されるようになったのは、今から約130年前の明治6年(1873)にさかのぼります。近代教育のあけぼの「学制発布」から、戦中・戦後の動乱期を経て現在へうつりかわる「学びのあゆみ」。その歴史を、教科書を中心に、学習用具や証書類といっただれもが手にしていた身近な資料でひもときたいと考えています。また、なつかしい学校の写真パネルや卒業アルバムなどを展示して、当時の学校の様子や教室の風景に思いをめぐらせてみたいと思います。資料館では、現在準備をすすめているところですが、古い教科書や学童用具、学校に関する資料等を保管している方を探しています。是非、資料館あて情報をお寄せください。お待ちしております。

募集中

小中学生体験学習『土器作り』

～土器を通して

昔の生活に触れてみよう～

夏休みに土器づくりをしませんか。資料館では、小中学生のみなさんを対象とした体験学習を企画しています。縄文時代や焼きものの歴史を学びながら、個性あふれるオリジナルの土器を作ってみましょう。製作した土器は、焼成し、当資料館展示室において作品展を行い、その後お返しします。

参加を希望する場合は事前申込みが必要です。受付開始は7月1日から。定員になり次第締め切りとします。

- 日 時 7月24日(土) 午前9時～12時
- 募集対象 小中学生 20名
- 指導員 当資料館職員など
- 参加費用 材料費として一人200円



「どんな形にする!？」(昨年度の様子)

盛岡市所在指定文化財紹介 ①

国指定天然記念物 シダレカツラ

大正13年(1924)12月9日指定 盛岡市大ヶ生瀧源寺

古くから珍木といわれるシダレカツラは、はじめ大迫町の岳で発見され、地元の早池峰神社・妙泉寺付近に植えられました。その原木のひこばえを大ヶ生に移植したのが瀧源寺の開山和尚といわれています。

後に巨木となって、天保6年(1835)には伐採され寺の用材として使われました。現在のものはさらにその萌芽が再生したもので、樹勢よく、新緑の季節には周囲の景観とあいまって見事なその姿を披露してくれます。

樹齢約170年 根周り615cm
幹周り440cm 樹高22m



昔の暮らしを見つめてみよう

—学校や地域活動団体などへ—

農具・民具を貸出します!

当資料館の、数多くの民俗資料を学校や子ども会、地域活動などの場に広く役立てていただくために、所蔵資料の一部を貸出します。

長い年月のあいだ使込まれてきた資料一つ一つにはその家々の暮らしぶりや手づくりの道具に対する使い手の愛着が見え、手にとってはじめて知ることがとてもたくさんあるものです。児童・生徒のみなさんは、古さのなかに新しい発見が、当時子どもだった皆さんは、懐かしさと感動が得られることと思います。



資料が身近になると

いろいろなことがみえてくる

資料の借受を希望する場合は、下記の内容を確認いただき、館あてお申込みください。

- ① 対象
盛岡市内の小学校・中学校、地区子ども会、町内会、老人クラブ、その他教育福祉施設等で郷土の資料を取り入れた学習や活動を実施しようとする団体等
- ② 貸出する資料
農具・民具などで当館が許可する資料
例) 米づくりなどの農耕具
炊事などの生活用具、
糸車などの生産用具など
衣類・履物類
貸出し資料の詳細については、申し込み時に確認ねがいます。なお、資料の状態等によっては、貸出しできかねる資料もありますので御了承ください。
- ③ 貸出しの条件
貸出しにかかるきまり(貸出し期限・運搬方法・取扱い方法など)の遵守。
- ④ 申し込み方法
資料館へ直接お問合せください。館職員と打ち合わせの上、貸出しの10日前までに所定の申し込み書を提出願います。



除草機（1条用）のつくり
舟形の枠に滑走板と転車部分がおさまる
2条用のものは同様の枠が2つ横にならぶ

大正から昭和のはじめにかけて活躍した手押の回転除草機

除草機が、はじめて東北に導入されたのは、明治の中頃で 岩手県では大正7～10年頃に北上川地域で使われるようになり、次いで大正末期にかけて沿岸部や県中北部に普及しました。

水田の雑草を取り除く作業は、かつては素手による手取りで、大変な労力と時間を要しました。また、田植え後の中耕（ちゅうこう：稲の生育中に稲株と稲株の間の泥土をかき回し、養分の分解と稲の発育を促進させる）を兼ねて、稲の生育段階や雑草の発生状況によって、いろいろな農具と手取りを組み合わせて3～5回行なわれていました。

この手押しの回転除草機は「雁爪」（がんづめ：潮干狩りの熊手のようなツメで水田の泥土を掘り起こす）「八反ずり」「除草田下駄」（じょそうたげた：足にはいて水田を歩き、雑草を土中に埋める）など、さまざまな農具の改良の結果行きついたものです。除草機能と同時に中耕の機能も備えており、

稲株の間を押して歩くと、転車部分が回転し水田の表面をかき回すことで雑草を取りのぞくようになっています。除草機導入後の昭和20年代、10ア当たり除草時間は、40～50時間程（水田作業全体の約20%）でしたが、その後の機械化や薬剤の導入などにより、現在では2～3時間まで軽減されています。

<除草作業の移り変わり>

	明治35年頃 雁爪	昭和10年頃 除草機
田植え	6月中旬	6月上旬～中旬
第1番除草	7月上旬 雁爪打ち	6月下旬～7月初旬 手取り、除草機
	7月中旬 雁爪直し	
第2番除草	8月初旬 手取り	7月中旬～7月下旬 手取り、除草機
第3番除草	8月中旬 手取り	7月大暑(23日)の頃 手取り

参考資料／岩手県立農業ふれあい公園農業科学博物館 第19回企画展水田除草用具の移り変わり2003 「日本民俗大辞典」 吉川弘文館 2000

となんの昔ばなし①
『山の上作太夫(千手観音と大岩)』

昔、南部(なんぶ)出身しゅっしの相撲すもことりに山の上作太夫というものがいました。人なみはずれた力と技で、江戸(えど)でも名をあげたそうです。

作太夫がまだ南部にいたころ、なんとかして大力をさずかりたいものだ、飯岡(いひの)いお千手観音に七月七夜(なつなつ)の祈願(いのり)をこめました。いよいよ満願(まんがん)という夜明けに、一人の美しい女の人

が小さな子どもをだいてあらわれ、ふもとまで用をたしてくるので、子どもをあずかってほしいといいますが、作太夫は承知(しょうち)してその子をだいていません。夜明けとなり、ふと手の中の子どもを見れば、これはなんと、大石(おおいし)にかわっているではありませんか。作太夫は大いにおどろき、その大石を左右(さゆう)にふりかためしとみると大石(おおいし)のかるいこと、まったく先ほどの子どもとかわりありません。作太夫は、大悲(だいひ)大慈(だいじ)だいたいじの観世音力(かんせいおんりき)がきずかつた

と大い(おおい)によろこんで、夏(なつ)いきんで江戸(えど)に上り、力士(りきし)となりその名をとどろかせたということです。

それからというものの、作太夫が飯岡山(いひのやま)のてつべんまでなげたとという大石(おおいし)が『力石(りきし)』といわれていました。その石は、今も千手観音堂(せんじゅくわんのん)のそばにあるとつたえられています。(終)



■出典『となんの民話』(都南歴史民俗資料館)